

中世後期における中欧の政治と文化  
——二つの宗派の国ボヘミアの国家運営——

薩 摩 秀 登

## Politics and culture in late medieval Central Europe

—Politics in Bohemia in the time of religious disunion—

SATSUMA Hideto

In 1436, the “Basler Kompaktat” ended the Hussite Wars, and Communion in both kinds was allowed to the Bohemian Hussites. There were, however, even in Bohemia and Moravia many Catholics, so this kingdom was the first state in Europe that had two different faiths: Utraquists (moderate Hussites) and Catholics. Before the beginning of the German Reformation, coexistence of these two faiths was the most important, but at the same time most difficult theme of this kingdom.

The emperor Sigismund was elected the Bohemian king in 1436, on the condition that he would entirely keep the “Kompaktat”. He also promised that he would respect the rights of Bohemian nobility. In fact, he intended to oppress the Hussites, but he died in 1437 without carrying out his policy.

The next king, Albrecht of Habsburg, ruled Bohemia only 2 years, and with his death Bohemia became the typical electoral kingdom. George of Podiebrad, the leader of the “landfrid” of Eastern Bohemia was nominated for the regent by the diet in 1452, and when king Ladislav, the son of Albrecht, died in 1457, he himself was elected the king of Bohemia in 1458, though he belonged to the Utraquists.

George called himself “the king of the two faiths”. His aim was to realize the peaceful coexistence of the Catholics and the Utraquists on the basis of the “Kompaktat”. His political ability was highly estimated even from the foreign countries.

But the “Kompaktat” did not fully justify the Communion in both kinds, for this “Kompaktat” was concluded with the Basel Council, not with the Pope. In 1462, Pope Pius II declared invalidity of this “Kompaktat”. The Hussites lost their justification.

The Hussites also required that Jan Rokycana, elected the Prague archbishop by the diet in 1435, should be formally acknowledged by the Pope. But the Pope denied this illegal “election”.

In this circumstances, George presented the project of “a Laegue of Princes”, a European peace organization, to European Princes. The project was not realizable in this period, but it shows a new conception of European politics on the basis of several “nations”, which was entirely different from the medieval Europe ruled by emperor and Pope. It is certain that his project was related to his aim in Bohemia.

All his plan ended with failure, and Hungarian king Matthias was elected the king by Bohemian Catholics in 1469. After “the second Hussite Wars”, recatholicizing process began in Bohemia under the reign of Jagello dynasty. This caused a rebellion of the Utraquists in Prague in 1483, and after 2 years, the Catholics and the Utraquists concluded “the Kutna-hora-treaty” that ordered to keep peaceful coexistence and strictly forbade compulsion in religious affairs. All the people were allowed to choose between the Catholic church and the Utraquist church. This treaty has been regarded as the highly progressive decision that realised complete religious tolerance. The importance of this treaty is undoubted, but, at the same time, it must not be overlooked, that this treaty was planned as the base of the consolidation of the power of nobility.

## 《重点個人研究》

## 中世後期における中欧の政治と文化

## ——二つの宗派の国ボヘミアの国家運営——

薩 摩 秀 登

## はじめに

14世紀のローマ教会に生じた混乱，その財政至上主義，そして教皇庁とヨーロッパ各国との間に生じた対立は，ローマ教会，特に教皇に対する強い批判を生み出すことになった。それは一方で公会議主義と呼ばれる運動を展開させたが，一方ではイングランドのウィクリフのような神学者の先鋭的な主張となって現われ，15世紀に入って，ついにボヘミアにおいてフス派運動と呼ばれる激しい教会批判を引き起こしたことはよく知られている。このフス派運動は，ボヘミアの貴族，市民，農民までも巻き込む広範な運動として展開され，1420年以降，ローマ教会によって5回にわたる十字軍が派遣されるほどの大規模な戦争に発展した。また，この運動には，ボヘミアの教会や社会の上層部を占めるドイツ人に対するチェコ人の民族運動という側面もあった。ローマ教会の支配を揺るがし，後の宗教改革へ向けての重要な一段階となったこのフス派運動に関しては，今日にいたるまでに膨大な数の研究がなされている<sup>註1</sup>。

本稿では，このフス派運動がその後のボヘミアやヨーロッパに何をもたらし，どのような問題を残したかを考えてみることにしたい。フス派戦争は，1436年の和解によって一旦は終結したものの，それによってフス派をめぐる問題が解決したわけではなく，ましてやフス派という宗派が消滅したわけでもなかった。ボヘミアはなおも近隣諸国から異端の国とみなされ，また教皇庁などからさまざまな圧迫を受け，宗教問題を軸にその国内情勢は大きく揺れ動いた。そしてこのボヘミア情勢は，15世紀のヨーロッパの政局にも少なからぬ影響を与えていたのである。

この「戦争終結後のフス派」もまた，特にチェコの人々にとっては，深い歴史的関心と呼び覚ますテーマであったといえる。フス派運動には，ドイツやスイス，フランスよりも約1世紀早く行われた宗教改革という性格があることは否定できないし，そのフス派がローマ教会と和解した後も，自分たちの信仰の一部の要素でも維持していたとするならば，それは来たるべきルターの改革運動へ向けて大きく道を切り開いたと解釈する余地が残されるからである。さらに，和解以降のボヘミアで，フス派とカトリック派の二つの宗教の共存状態が出現したことも，歴史家の関心をひく十分な理由があ

った。本稿で見ていくように、それはとても平和的共存と呼べるような状態ではなかったが、ともかく1485年になって「クトナー・ホラの協定」という、当時としては例のない先進的な内容を持った宗教的寛容令がボヘミアの議会で決定されたことは事実である。この「宗教的寛容」が、いわばボヘミアの貴族身分主導の形で成立したことから、諸身分の自由を尊重する体制こそがこうした寛容をも可能にしたという解釈が生み出されることになった。それは16世紀以降、徐々にボヘミアにおける強力な王権を築いていったハプスブルク家の支配を強圧的な統治とみなし、これに対抗した諸身分を先進的な自由の体現者とする見方にも通じるものであった。

しかし、和解成立後のフス派には、後で見るようにそのプロテスタント的性格を指摘する重要な研究があるにせよ、それがドイツの宗教改革に直接の影響を与えたとする明確な根拠はない。また諸身分の自由と宗教的寛容とを単純に結び付ける見方も今日では全く通用しなくなっている。それでもなおここであえて和解以降のボヘミアに注目するのは、下に述べるような理由による。

フス派運動は、ローマ教会側から見れば、教会の指示に従わない異端運動であった。しかし中世盛期からヨーロッパ各地で繰り返された異端運動とフス派運動との違いは、この宗派がボヘミアという一つの国家の主導権を握り、しかも自分たちの改革の主張を戦争を通して貫徹し、認めさせたことにある。その改革の主張は、後に見るように最終的には極めて妥協的かつ形式的なものとなっていた。それでもともかくフス派は、唯一普遍的「救い」をもたらす機関としてヨーロッパに数百年君臨してきたローマ教会に対して正面から論争を挑み、ローマ教会よりも正しいと彼らの主張する「救い」の方法を、バーゼル公会議という正式の機関によって、限定的にはあれ認めさせたのであった。この点だけを見ても、フス派は、16世紀におけるカトリック・キリスト教世界の分裂へ向けての重要な一歩を記したとみなせるのである。

しかし、ローマ教会にフス派の主張が認められたことは、次の課題を投げかけた。和解を締結するに際してフス派は、本来、ボヘミア王国とモラヴィア辺境伯領においてフス派だけを公認の宗派とすることを要求していた。しかしこの二つの地域でさえ多数のカトリック勢力を抱えているという現状ではそれは不可能であり、またとうてい公会議の承認を得られるはずもなかった。したがってボヘミアとモラヴィアは、二つの宗派の国として運営されていくことになった。一つの国で二つの宗派が共存するという、ヨーロッパで初めての試みがここで始められたわけであり、それが極めて困難な道であることは、当初から多くの人々が予想するところであった。本稿では、こうしたボヘミア国家の運営が、15世紀半ばから後半という時代の中でどのように行われ、さまざまな困難な課題にどのような解決が試みられたかを検討してみようとするものである。こうした考察を通じて、この時期のボヘミア国家が極めて身分制的傾向の強い、いわば権力分散型の社会であったことと、一定程度の宗教的寛容が実現したこととの間に、どのような関連があるかについても、筆者なりの考察ができればと考えている。そしてこの宗教的寛容の一つの到達点とみなされている「クトナー・ホラの協定」について、従来の捉え方の妥当性を検討してみたい。

フス派運動が、戦争中だけでなく和解成立後もボヘミアやモラヴィアの社会を動かす重要な要因であったことは、近年の研究では広く了解されているといってよい。すでに1965年にドイツの歴史家

F. ザイブトは、革命の急進的勢力を視点の中心に据えた従来の研究を脱却して、フス派運動を多数の身分がそれぞれ独自の目的を追求してかかわった複合的な革命として捉え、構造的な分析を試みた<sup>注2</sup>。この研究によって、カトリック教会と和解した穏健派もまた独自の革命を推進する勢力であったことは広く認められるようになった。そして1980年代になると、W. エーバーハルトはボヘミア社会の身分制的構造と宗派との関係に注目しつつ、フス派の信仰の内容よりもむしろその機能的側面を重視することによって、これが16世紀にいたるまで大きな役割を果たしていたことを実証した<sup>注3</sup>。一方、F. G. ハイマンは主に60年代の研究で、和解成立後の穏健なフス派がすでに教会改革運動としての性格を失い、宗派としては意味をなさなくなっていたとする説に反対し、それがなおも「プロテスタント的」性格を維持していたことを強調した<sup>注4</sup>。そしてハイマンによる、フス派出身の国王イジー・ス・ボジェブラト（在位1458～71年）に関する研究は、この時代のヨーロッパ情勢とボヘミアとの関連を知る上でも重要である<sup>注5</sup>。そしてフス派運動全体に関しては、近年になってチェコの歴史家 F. シュマヘルが従来の研究をほとんど網羅しつつくした4巻本の著作を発表した<sup>注6</sup>。本稿は、基本的にこれらの研究に立脚するものである。

注1 後の部分で紹介するものを除いて、フス派運動に関する最も重要な研究としては、Palacký, F., *Dějiny národu Českého v Čechách a na Moravě*. III, IV. 3. vyd., Praha 1877–1878. Tomek, W. W., *Dějiny válek husitských*. 2. vyd., Praha 1898. Bartoš, F. M., *Husitská revoluce 1. Doba Žižkova 1415–1426*, (*České dějiny* II 7), Praha, 1965. Bartoš, F. M., *Husitská revoluce 2. Vláda bratrstev a její pád 1426–1437* (*České dějiny* II, 8), Praha 1966. Macek, J., *Husitské revoluční hnutí*, Praha 1952. Macek, J., *Tábor v husitském revolučním hnutí I–II*, Praha 1952–1955. Kaminsky, H., *A History of the Hussite Revolution*, Berkeley, Los Angeles 1967. また日本では、山中謙二『フシーテン運動の研究』聖文舎、1948年（第二版1974年）が唯一の包括的な研究である。

注2 Seibt, F., *Hussitica. Zur Struktur einer Revolution*. Köln, Graz 1965. (2., erweiterte Auflage, Köln, Wien 1990). この著書については、以下の紹介がある。浅野啓子「F. Seibt, *Hussitica: Zur Struktur einer Revolution*. (Köln-Graz) をめぐって」『東欧史研究』12 (1989) pp. 77–85. またザイブトのフス派に関する他の重要な論稿は、Seibt, F., *Hussitenstudien. Personen, Ereignisse, Ideen einer frühen Revolution*. München 1987. に収められている。

注3 Eberhard, W., *Konfessionsbildung und Stände in Böhmen 1478–1530*. München, Wien 1981. さらにエーバーハルトは次の著書で同様の観点からその次の時代を扱っている。Eberhard, W., *Monarchie und Widerstand. Zur ständischen Oppositionsbildung im Herrschaftssystem Ferdinands I. in Böhmen*. München 1985.

注4 Heymann, F. G., *The Hussite-Utraquist Church in the Fifteenth and Sixteenth Centuries*, in: *Archiv für Reformationgeschichte*, 52 (1961), pp. 1–16.

注5 Heymann, F. G., *George of Bohemia, King of Heretics*. Princeton 1965. なお、ボヘミア国王イジーに関しては Urbánek, R., *České dějiny III. Věk poděbradský 1–4*, Praha 1915–1962. が極めて重要であるが、1464年までの未完の叙述に終わっている。

注6 Šmahel, F., *Husitská revoluce I–IV.*, 2. vyd., Praha 1996–1997. なおこれらのほかにボヘミア史の通史として、Bosl, K. (hrsg.), *Handbuch der Geschichte der böhmischen Länder*. I. Stuttgart 1967, II. Stuttgart 1974. *Přehled dějin Československa I. 1*, Praha 1980. Hoensch, J. K., *Geschichte Böhmens. Von der slavischen Landnahme bis in 20. Jahrhundert*. München 1987. を参照した。

## 1. フス派の形成とその諸集団

「はじめに」において述べたように、フス派運動は、14世紀にヨーロッパ各地に広まった教会批判を背景に展開した運動であった。人間の魂の救済を一手に引き受ける機関としてヨーロッパに君臨したローマ教会は、14世紀になると各地に台頭した新しい国家権力、特にフランス王権と対立し、有名な「アヴィニョン教皇庁時代」を到来させた。ボヘミア国王であり神聖ローマ皇帝でもあったカール4世（在位1346～78年）の努力によって、1377年に教皇のローマ帰還が実現したものの、翌年には教会分裂が生じ、教会の混乱にさらに拍車をかけることになった。二つの教皇庁の争いは世俗の権力をも巻き込み、人間に救いをもたらすはずの教会が、実は権力と富を追い求める単なる政治集団にすぎないという印象を人々の間に強めていった。こうした状況下でオックスフォード大学のウィクリフは、聖職者が世俗的権利を行使することを批判し、また既存の教会の階層秩序を批判して、「選ばれた人々の共同体」こそが真の教会であると主張した。そしてローマ教会が行う祭祀や秘蹟に対する疑念を表明し、簡素な儀礼や、救済についての合理的な解釈を主張したのである。

こうしたウィクリフの主張は、1390年代にはプラハ大学に伝わっていたと考えられている。1403年に大学当局はウィクリフの説を断罪したが、大学を構成する四つの「国民団」のうち、「ボヘミア国民団」がこれに抗議し、しだいに彼らの間に「ウィクリフ派」と呼ばれるグループが形成されていった。これに対して、主にドイツ系の人々からなるザクセン、バイエルン、ポーランドの三つの「国民団」は、反ウィクリフ派を形成した。このように、教会改革をめぐるプラハ大学における対立は、当初からチェコ系のマギステルたちが改革派、ドイツ系のマギステルたちが反改革派というおおまかな構図を見せていたのである。その背景には、大学内部で多数を占めるドイツ人マギステルたちに対するチェコ人マギステルたちの不満があった。さらに、当時のボヘミアでは大学で教育を受けても満足な職を得られない貧困な聖職者が増加しており、特にチェコ人たちの間で、有利な聖職禄を独占する上層部聖職者に対する批判が高まっていた。ウィクリフ派は、そうした不満や批判を吸収し、さらに一般の市民たちの間に広まる、聖職者への不信の念をも吸収しながら、急速に支持を拡大していったのであった<sup>注1</sup>。

さらにウィクリフ派に対しては、世俗貴族や国王ヴァーツラフ4世（在位1378～1419年）もまた、概して好意的であった。彼らにとっては、聖職者の財産所有を批判し、教会改革の役割を世俗の当局に求める改革派の主張は好都合なものであった。また特に国王に関しては、1409年のピサの公会議の開催問題において、大学の「ボヘミア国民団」と結ぶのが有利であったという事情があった<sup>注2</sup>。

しかし、プラハでウィクリフ派の説教師として圧倒的な人気を誇ったマギステル、ヤン・フスが1415年7月6日にコンスタンツの公会議で異端と断罪されて火刑に処せられ、翌年5月30日にその同僚のイエロニムもまた同じ場所で火刑に処せられたのをきっかけに、今や「フス派」と呼ばれるようになった改革派が多数の貴族の支持を獲得していった事実は、そうした事情だけでは説明できないであろう。1415年9月2日にボヘミアとモラヴィアの貴族の一部がコンスタンツの公会議にあて

て送った抗議文は、フスの処刑は「我々の王国とモラヴィア辺境伯領および我々すべてに対する永遠の侮辱であり、誹謗である」と述べ、これをボヘミア国家全体の問題として受け止めることを明言している<sup>注3</sup>。彼らはこれをボヘミア王国民とモラヴィア辺境伯領の住民の権利と自由に対する重大な侵害とみなしたのである。だとすれば、1414年末にマグステル、ストシーブロのヤコウベクが「より正しい救いの方」法」としてプラハの教会で始めた二種聖餐が、しだいに多くの貴族の支持を獲得していったのも、それがフスの処刑に対する抗議の意志表明であったと考えれば最も理解できるであろう。

二種聖餐は、プラハ大司教コンラート・フォン・ヴェヒタ（在位1413～31年）の禁止命令にもかかわらずプラハやその他の都市に拡大し、1417年3月10日にはプラハ大学によって公式に承認されて、フス派の象徴となっていった。平信徒でも聖体拝領に際して葡萄酒の拝領にあずかれるというこの方法は、原始教会の本来の姿に戻るという改革派の主張によく合致していた。一方ローマ教会側は、問題が聖体拝領という、一般信徒が最も日常的に受ける秘蹟にかかわるだけに、こうした逸脱を決して認めようとはせず、この問題はフス派とローマ教会の間の論争の焦点になっていったのである。

国王ヴァーツラフは、ローマ教皇や、弟でドイツ国王とハンガリー国王を兼ねるジクムントからの度重なる圧力にもかかわらず、フス派に対して明確な態度をとろうとしなかった。しかし1419年7月30日にプラハ新市街で急進改革派の説教師ヤン・ジェリフスキーが市庁舎襲撃事件を起こし、翌8月の16日にヴァーツラフが急死したことにより、事態は急速に緊迫した。プラハでは教会や修道院への襲撃が相継ぎ、多くのドイツ系市民は市を去っていった。一方農村部では、終末論を唱える急進的な説教師や一部の中小貴族に率いられた人々が独自のグループを形成し始め、1420年3月には彼らは南ボヘミアに堅固な要塞都市を建設してターボルと名づけた。そして同じ3月に教皇による「ウィクリフとフスの異端討伐の勅書」が出され、ボヘミア王位継承を要求するジクムントの率いる「対フス派十字軍」がモラヴィア経由でボヘミアに進撃し、フス派戦争が始まったのである。

この頃成立した「プラハの四箇条」といわれる文書には、フス派の基本的主張が要約されている。パラツキーはその成立の日付を1420年7月3日としているが、現在では、おそらくプラハを中心にフス派のさまざまなグループが議論を重ねるうちにしだいに現在残される形になったものと考えられている。ここでは、「チェコの共同体と、神の希望に忠実なキリスト教徒は、（中略）新約聖書に示されている次の四点を守る」こと以外を意図しないとした上で、四つの項目をあげる。それは順番に、1. 聖職者による自由な説教、2. 二種聖餐、3. 聖職者による世俗的財産所有の禁止、4. 聖書に背く大罪の取締りと処罰となっている。説教の自由を聖職者に限定するなど、その主張はフス派の中でも穏健な、プラハの上層市民や大学のマグステルたちの意見に近いものとなっている<sup>注4</sup>。これらの中で、当時のローマ教会の主張と明らかに食い違うのは2番目の二種聖餐だけであり、他の三点、特に三番目と四番目は、実態はどうであれ、教会改革を求める人々によってことあるごとに要求されており、ローマ教会側も即座に退けることのできないものであった。しかしだからといってフス派の主張が二種聖餐だけに集中しており、他の三点はそれに付随するものとするのは正しくないであろう。

う。そうでなければ、二種聖餐が二番目に置かれている理由が説明できなくなる。四箇条は、フス派の改革理念を自由に伝えることができるという「説教の自由」を筆頭にして、四項目が全体として一つの改革の主張となっているのである。特に第四条には、現在の教会の状態では、正しい人間でさえ救いにあずかることができないという危機感が表明されている。フス派はこうした改革要求をかけることにより、自ら当時のヨーロッパの教会改革運動の先頭に立とうとしたわけである。その意味で、ピサの公会議に始まる公会議主義の運動とフス派運動とは、同じ志向を持っていたのである。少なくともフス派はそう考えていたし、フスが一人の改革派の神学者として自らコンスタンツに赴いたのも、そうした理由からであった。

しかしフス派の主張はローマ教会の受け入れるところとはならず、逆に彼らは異端と断定されて、その撲滅のためにヨーロッパ各国から集められた十字軍が差し向けられた。しかしジクムント率いる第一回十字軍は、1420年7月14日にプラハ東方のヴィートコフの丘でヤン・ジシュカ率いる急進フス派の軍に大敗した。その後、ローマ教会は、第五回までの十字軍を派遣したが、いずれも目的を果たすことができず、逆に1428年から33年までの間、急進フス派の軍が、略奪とフス派の宣伝を目的に、周辺諸国を遠征してまわることになった。そしてこの戦争の間に特にボヘミアでは教会財産の大部分が世俗化され、その多くは貴族の手に、一部は市民の手にわたっていった。国王財産もまた大部分は貴族の手に落ちた<sup>5</sup>。またカトリック派の市民は自発的に市を退去するか、あるいは亡命を余儀なくされたが、彼らの中にはドイツ系の富裕な市民が多かったといわれる。このようにしてフス派戦争はボヘミアにおける大幅な社会的変革を伴ったのである。

しかし戦争中のボヘミアとモラヴィアは、政治的および宗教的に決して統一的であったわけではなかった。戦争期間を通じて、ボヘミア西部には都市ブルゼニを中心とするカトリック派の同盟が存在したし、南部では常にカトリックに忠実な大貴族ロジュンベルク家が支配していた。そしてモラヴィアはオロモウツ司教領を中心にカトリック派が安定した勢力を保っていた。

そしてフス派内部にも、当初から穏健派と急進派の区別があり、両者は決して一つにまとまったことはなかった。穏健派はプラハ旧市街の上層市民および大学のマギステルたちの指導のもとで、プラハを中心とした都市同盟を作っていた。彼らは教会と社会の改革はほぼ達成されたと考え、ローマ教会との見解の違いはほぼ二種聖餐だけに絞られていたもので、ウトラキストすなわち二種聖餐派、あるいは聖杯派などと呼ばれることも多い。特にマギステルのヤン・プシーブラムのような人物は、ローマ教会と早期に和解することを望んでいた。

プラハなど主要都市の役割は特にこの戦争の初期の段階で大きく上昇し、その指導部たちは、この戦争を機会に、王国の身分制的秩序を大きく組み替えて、市民身分を貴族よりも上位に置いた国制を築き上げようとしていた。特にプラハ市民の間では、国王不在という状況の中で、今やボヘミア王冠諸邦の中核になるのはプラハであり、自分たちこそ王国の担い手であるという意識が強く働いていた。

しかし多くは同じ穏健派に属しつつも、貴族の立場は少々異なっていた。ボヘミアとモラヴィアにおける世俗貴族の政治的自意識は13世紀後半から急激に高まったことが知られているが、今や彼ら



は、1310年に始まったルクセンブルク王朝時代に国王や教会によって奪われていった政治的主導権を、再び取り戻す好機が訪れたと感じていた。フス派の貴族たちは、教会の奢侈を禁止するという名目で教会や修道院の財産を奪い、あるいは保護の名目でそれらを支配下に組み込んでいったが、それは彼らの考えからすれば、貴族身分が本来の王国の支配身分にふさわしい地位を取り戻すための正当な行為だったのである<sup>注6</sup>。そして同様のことは、カトリック派の貴族も行ったのであった。結果としてフス派戦争は、これらの貴族の目的をほぼ達成した形で終了し、その後のボヘミアとモラヴィアでは、彼らを中心とした国家運営が展開されていくことになる。

一方、ターボルに拠点を築いた急進派には、下層市民や農民が多かったが、一部の貴族も加わっていた。彼らの主張は、1420年8月5日にプラハの共同体に提出された「12箇条」に見ることができる<sup>注7</sup>。内容は、あらゆる華美、虚飾の禁止、教会における「偶像崇拜」の禁止、世俗の法を廃止してすべてを神の法のもとに置くことなど、フス派のプラハ市政府でさえ受け入れられないものを含んでいる。プラハの書記として年代記を記したブジェゾヴァーのヴァヴジネツによれば、ターボルの町では富める者も貧しい者も同じように食物を分け合い、剃髪もせずに髭をのばした司祭が平服のままミサを執り行なっていたという。そして彼らの間では、踊り、サイコロ遊び、酔っ払いなどは禁じられ、争い、盗み、騒々しい音楽などは全くなく、すべては魂の救いと、聖職者を本来の姿に戻すために行われていたと伝えられる<sup>注8</sup>。彼らが原始共産制的平等社会の実現を目指したと考えるのは行き過ぎだが、神の法を唯一絶対の基準とする彼らの主張が、後のドイツやスイスの宗教改革時代の急進勢力に通じるものであることは確かであろう。1420年9月にはペルフジモフのミクラシュという聖職者がターボルの「長老」に選ばれ、ターボル派の教会は事実上カトリック教会から分離した。

しかし本来は終末論的考えのもとに築かれたターボルの共同体も、戦争がしだいに長期化するにしたがってしだいに一個の都市としての性格を強めていき、ターボル派と呼ばれる都市同盟の頂点の地位に立つようになった。初期の指導者ジシュカが1423年にフラデツ市に移った後、1426年頃からプラハのドイツ系都市貴族出身のプロコプ・ホリー（大プロコプとも呼ばれる）の指導下で、ターボル派は戦争終結時まで強大な勢力を保つことになる<sup>注9</sup>。

最後に、戦争後にしだいに重要な勢力となっていく「ボヘミア同胞団」にもふれておかねばならない。その指導者ペトル・ヘルチツキー（1390年頃～1460年頃）は、おそらく南ボヘミアの下級貴族出身と思われ、当初は急進フス派の説教師の教えに共鳴して1419年にプラハに向かった。しかしフス派の指導者たちが「神の正義の敵」に対しては武器をとって戦って良いと主張するのに賛成できずに、翌年にはプラハを去った。そして急進派でさえ専門的軍事集団になっていくのを見てこれからも離れ、故郷の近くの農村で、祈りと労働に徹する生活を生涯続けることを決意したのである。一切の政治から身を引き、聖書の言葉への徹底した沈潜を説く彼の思想は、平和主義的であり、かつ極めて急進的であった。晩年のヘルチツキーの周辺には、支持者たちの小規模な共同体が形成され始め、同胞団と呼ばれるようになった。しかしフス派の中の最も被妥協的な集団である彼らは、同じフス派からも迫害され、その存在が積極的な位置づけを与えられるのは、16世紀の宗教改革時代を待たねばならないのである<sup>注10</sup>。

注1 ヴェルナーは、15世紀初頭のボヘミアの聖職禄が6327、その候補者が2万1496人という数字をあげている。

Werner, E., Jan Hus. Welt und Umwelt eines Prager Frühreformators. Weimar 1991. p. 81. なお、プラハ大学で「民族的」対立が顕著になっていったのに対して、プラハの市内ではフス派戦争勃発直前まで、チェコ人とドイツ人の目立った対立は起きていない。フス派戦争以前のプラハ市政については Mezník, J., Praha před husitskou revolucí. Praha 1990. プラハなどの都市の民族構成については Schwarz, E., Die Volkstumsverhältnisse in den Städten Böhmens und Mährens vor den Hussitenkriegen. in: Bohemia, Jb. d. Collegium Carolinum 2 (1961), pp. 27-111.

注2 1400年にドイツ王位を廃位されていたヴァーツラフに対して、公会議開催派は、アヴィニョンとローマの両教皇に対する中立を保つように要請し、ピサで新しく選ばれる教皇によって再びヴァーツラフがドイツ国王として承認されるように働きかけると告げた。しかしプラハ大学で多数を占めるドイツ系マギステルたちはローマ教皇支持の姿勢を崩さなかったため、ヴァーツラフは1409年1月18日の勅令で、重要な決定に際してはドイツ系三「国民団」は合わせて一票を、「ボヘミア国民団」は三票を投じるように、規約を改正した。ドイツ系のマギステルや学生たちはこれに抗議して、半年のうちにほとんどがプラハを去った。この事件にいたる過程については拙稿「プラハとフス」、石塚正英他編『都市と思想家Ⅱ』法政大学出版局1996年、295～308頁。

注3 Archiv český čili staré písemné památky české i moravské, sebrané z archivů domácích i cizích. ed. F. Palacký, J. Kalousek, G. Friedrich, Praha 1840-1904. (以下AČ) III. pp. 187-193.

注4 AČ III. pp. 213-216. 以下に原文にしたがって四項目をあげておく。「1. 神の言葉はチェコ王国全体において、自由に、妨げられることなくキリスト教の聖職者によって、説かれるべきである。2. 尊い聖体である神の体と血は、パンと葡萄酒の両種によって、死の罪によって妨げられていないあらゆる忠実なキリスト教徒に、自由に与えられるべきである。3. 多くの聖職者や修道士は、世俗の法にもとづいて多くのこの世の財産を所有し、それによってキリストの教えに反し、聖職者としての自分の務めを損ない、また世俗の領主身分を大きく妨げている。このような聖職者の不正な財産は奪われ、禁止されるべきであり、彼らは聖書にしたがって我々の模範となる生活をおくり、キリストおよび使徒と同じ状態になるべきである。4. 死に値する罪を犯した人々、特に公然とあるいはそうでなくても神の法に背いた人々は、どのような身分であれ、然るべき方法で、そのための職務を持つ人々によって捕えられ、取り締まれるべきであり、またこの国についての悪意に満ちた不正な噂は除かれるべきであり、そしてチェコの王国と民族に広く善が与えられるべきである。なぜなら聖パウロもいうように、そのような罪については、その本人だけでなく、それを許す人たちもまた、同じく死に値するからである。それらは一般の人々においては、淫らな行為、暴食、盗み、殺人、偽り、詐欺、偽誓、魔術、いんちき、商売上の不正、有害で貪欲な利得、高利、およびこれらに類した罪である。一方聖職者においては、聖職売買の異端、そして洗礼や堅信、告悔、神の体や聖油、結婚に際しての金銭の徴収、30のミサや死者のためのミサ、徹夜の祈祷、その他の祈祷などを有料として金銭を徴収すること、埋葬、教会の歌、鐘のための金銭の徴収、教会や礼拝堂、祭壇、墓地の聖職者の叙階における金銭の徴収、贖宥による金銭の徴収（後略）」なお原文ではそれぞれの項目の後に、聖書から典拠をあげているが、その部分は省略した。またこの四箇条は、1421年6月3日から7日にかけてチャースラフで開かれた王国議会で、ほぼ同じ形で承認され、基本原則となった。(AČ III, pp. 226-230.)

注5 ただし1422年5月にリトアニア大公ヴィタウタスの甥コリブートがプラハで国王代理の地位についた時には、プラハ市が掌握していた国王のレガリアが返還された。しかしプラハの共同体は市民の没収財産の処分に関する権限を確保するなど、国王と諸身分との間には一種の権限分担が行われた。Šmahel, Husitská revoluce III, p. 124.

注6 14世紀前半までのボヘミア貴族の動向については、拙著『王権と貴族—中世チェコにみる中欧の国家—』

日本エディタースクール出版部，1991年。

注7 テキストは Vavřince z Březové Kronika husitská, 52. (Fontes rerum bohemicarum, Tom IV. Praha, 1884. 所収)

注8 Vavřince z Březové Kronika hustiská 54.

注9 一方フラデツを中心とするグループは，1424年にジシュカが死んだ後，「孤児」と呼ばれるやはり急進的な勢力を形成した。なお，これらのフス派の諸グループがどのようなボヘミア国家の将来像を抱いていたかに関しては，Seibt, F., Zur Entwicklung der böhmischen Staatlichkeit 1212–1471. in: Seibt, Hussitenstudien, pp. 133–151.

注10 Seibt, F., Petr Chelčický. in: Seibt, Hussitenstudien, pp. 209–216.

## 2. 「二つの宗派の国」の発足

1431年にバーゼルで開かれた公会議は，それまでのローマ教会の方針を転換して，フス派との和解の実現をめざすことになった。その背景には，同年8月14日の，西ボヘミアのドマジュリツェ近郊における，第五回十字軍の無残な敗北があった。ターボル派などの軍の遠征による被害を被っているドイツでも，フス派との和解が望まれていた。そしてボヘミア王位の継承を主張するジクムントもすでに高齢に達しており，フス派との和解は避けられないと考えるようになっていた。

しかしそれだけでなく，公会議側には，公会議の開催を望んでいない教皇エウゲニウス四世の機先を制してフス派問題を解決し，教会における主導権を握るというねらいがあった。こうした公会議派と教皇との対立は，フス派にとっても後に深刻な問題を引き起こすことになる。

一方ボヘミアでも和解を望む意見は強く，11月半ばに穏健派の指導者ヤン・ロキツァナがプラハ中心部のティーン聖堂でフス派に交渉を呼びかける公会議の書簡を読み上げた時，人々はこれを歓迎して聞いた。それは，フス派が常に自分たちこそ正しい教会を目ざしていると考え，ローマ教会との議論を望んでいたことからして，当然であった。しかしボヘミア側もまた，長期の戦争による商業活動の停滞などの悪影響が深刻となっており，都市や農村の住民は小麦の価格の上昇などに苦しめられていた。いずれは和解によってこの戦争を終わらせなければならないことは，すでに明らかになっていたのである<sup>注1</sup>。

フス派の使節は1433年1月4日にバーゼル入りし，約三ヵ月間の交渉が行われた。その後5月には公会議の使節がプラハに入って交渉が続けられ，6月には議会が開催されて公会議との和解が議論された。ここでプロコプ・ホリーやロキツァナは，「プラハの四箇条」がボヘミアとモラヴィアのすべての住民に適用されることを主張したが，将来これらの地域に再びローマ教会の地位を確立することを望む公会議側がこれを受け入れる可能性はありえなかった。議会は，今後の交渉を有利に進めるために，7月からボヘミアにおけるカトリック派の拠点ブルゼニを包囲し，一方で公会議との議論を続けるという戦略をとった。そして11月30日にプラハで，公会議の使節とフス派の聖職者との間で和解案がまとめられた<sup>注2</sup>。これは後に成立する「バーゼル協約」と呼ばれる正式な和解文書の基礎となったものであり，ボヘミアとモラヴィアの人々に対して完全な赦免を施し，フス派の年来の主張

である二種聖餐を承認した文書として、決定的な重要性を持つものである。

しかし二種聖餐が承認されたとはいえ、それは「他の点に関しては普遍的教会の信仰と典礼に一致している」「ボヘミア人とモラヴィア人に」のみ許され、しかもその際司祭は、「(葡萄酒とパンの)それぞれの中に全キリストが存在していることを固く信じるように教えなければならない」という重要な付帯条件がつけられていた<sup>注3</sup>。すなわち二種聖餐は形式的には承認されるが、内容的には一種聖餐が正しいとされているわけである。四箇条の他の項目に関しても、重大な罪は「当該の裁判権保持者によって」裁かれること、神の言葉の自由な説教は「司教の権威のもとに上級機関の委託で」行うこと、そして「教会財産は教父たちの規定通りに管理すること」という形になっていた<sup>注4</sup>。フス派の改革要求は、極めて穏健で形式的な形に変えられた上で承認されたのである。この線にしたがうならば、ターボル派などの急進派が公会議による承認を得られないのは明らかであった。

果たして、この和解文書の承認をめぐるフス派は分裂した。プラハ同盟や大多数の貴族らはこの和解案を支持したが、急進派はこれを拒否した。そしてブルゼニ包囲を解いて一旦東ボヘミアに向かった急進派の軍と、穏健派貴族たちの軍とが1434年5月30日にリパニの丘で衝突し、穏健派の圧倒的勝利によってフス派戦争は事実上終結するのである。

しかし最終的な和解の成立までにはなお2年間を要した。ロキツァナやヤン・ヴェルヴァルなどといった人々が、なおも二種聖餐をボヘミアとモラヴィアのすべての人々の義務とすることに固執したからである。結局その主張は通らず、1436年2月29日にボヘミアの議会は和解案を承認した。そして同年7月5日、モラヴィアのイフラヴァにおいて、シクムントやその女婿にあたるハプスブルク家のオーストリア大公アルブレヒト<sup>注5</sup>などの列席のもとに、1433年11月の和解案がほぼそのままの形で正式承認され、ボヘミアとモラヴィアは再びカトリック教会のもとに復帰したのであった<sup>注6</sup>。

しかしこれはある意味で、問題を先送りしただけの和解であった。問題は、いろいろな解釈の余地を残した協約の文章そのものの中にすでに含まれている。公会議側では、これによってフス派がカトリック教会に完全に復帰し、二種聖餐はそのために認められた特例にすぎないと考えていたのに対して、フス派側では、自分たちの主張する「救い」の方式が、ついに全ヨーロッパに認められたと考えた。彼らの前には、こうして承認を勝ち取った自分たちの信仰を維持していくという、これまで以上に粘り強い努力を要する課題が待ち受けていたのである。

すでに述べた通り、フス派革命の最大の成果は、こうして普遍的なローマ教会の支配の一角を崩した点にあると考えられる。確かに、和解した穏健な貴族、市民、マギステルらの信仰は、かつてフスらが唱えた教会改革の主張とははるかに隔たった、形式的なものになっていた。しかし、いかに彼らが穏健で妥協的になっていたにせよ、彼らがローマ教会の教える「救い」を否定して、より聖書にもとづいた別の方式を掲げたことは、それ自体が非常に革命的だったのである。

ただし、フス派は当初の望みに反して、カトリックと勢力を分け合ってボヘミアとモラヴィアで存続していくことになった。カトリック・キリスト教世界が確立して以来初めて、二つの宗派から成り立つ国が成立したのである。この国家の運営がいかに困難な課題であるかは、すでに当時の人々が予想するところであった。やや大胆な発想ではあるが、この「パーゼル協約」以降のボヘミアとモラヴ

ィアは、1555年の「アウクスブルクの宗教和平」以降のドイツに、あるいはさらに1598年の「ナントの勅令」以降のフランスになぞらえることができるかもしれない。異なるのは、宗教改革以降と違って15世紀のボヘミアはなおも多くの人々から「異端の国」とみなされて孤立していたこと、そしてボヘミアには、ドイツの領邦君主のように一つの領域に強力な支配権を行使する世俗権力が存在せず、多数の貴族が権力を分散しあう形でこの二つの宗派の体制を維持していかなばならなかったことである。

ただし我々はここで、和解成立後のフス派の信仰が二種聖餐という形式を除いてほとんどカトリックと変わらないものになっていたとする誤解に陥らないように、ハイマンの説を参考に見ておく必要があるだろう<sup>注7</sup>。ハイマンは1471年まで聖杯派の教会を率いた神学者ヤン・ロキツァナに注目している。ハイマンによれば、ロキツァナは、煉獄や聖人によるとりなしに疑念を抱き、時には、聖職者の資格が「損なわれない」ことにも疑念を抱いた点で、穏健派というよりはむしろ中間派であった。そして彼は、厳格なピューリタニズム、修道制への反発、礼拝における母語の役割の強調、自立的教会組織確立の志向など教会政策上の姿勢においても、やはり穏健派とは一線を画していたという。そして秘蹟一般に対して慎重な考えを持っていたが、聖餐の秘蹟の重要性だけは確信しており、聖体の中にキリストが現存するという主張において、ターボル派とも異なっていた。このようなロキツァナが聖杯派の教会を指導したことは、それがなおも「プロテスタント的」性格を維持する上で非常に大きな役割を果たした。しかし彼は、聖体拝領の秘蹟はローマ教皇を通じて正式に叙階された聖職者によって授けられなければならないと考えており、そのために聖杯派はローマ教会からの離脱に踏みきることができなかった。このことは、特に15世紀後半になって、フス派の教会の維持を非常に難しくする原因となっていくのである。

このように、フス派の改革理論の重要な部分を受け継いだ聖職者がなおもブラハで主要な地位にいたことは、フス派の信仰の維持には大きく貢献した。フス派とカトリックの信仰の違いが、二種聖餐か一種聖餐かという形式的な点以外になくなっていたならば、おそらくフス派からカトリックへの多数の改宗者が現われ、バーゼル協約を守って二つの信仰を共存させるということ自体がほとんど問題とならなくなっていたであろう。

では「二つの宗派の国」を運営していく役割を担ったのはどのような人々であり、そしてそのためにはどのようなことが必要とされたのであろうか。次にその点を、時代をさかのぼって見てみることにしたい。

注1 Čornej, P., Lipany. Praha 1990. pp. 1-4.

注2 Čornej, Lipany. pp. 10-13.

注3 協約の全文は AČ III. pp. 398-412. 二種聖餐に関する本文は次のようになっている。「教会の統一と平和を現実に確かに受け入れ、二種による聖体拝領の習慣を除いたすべての点に関して普遍的教会の信仰と典礼に一致している、上述のボヘミア人とモラヴィア人については、一人であれ多数であれ、我々の主であるイエス・キリストとその正当なる花嫁である教会の権威のもとに、二種による聖体拝領を行うことができる。そしてこの条項は聖なる公会議において十分に議論され、全体教会の真実のためにこの条項に関して何が維持

されるべきか、そしてキリスト教徒の人々の利益と救いのために何が行われるべきかが考えられるべきである。そしてすべてが適切かつ正当に議論された後、なおも上述の二種による聖体拝領を受けることを望んだ場合、そしてそれを彼らの使節たちに申し述べた場合には、聖なる公会議は上述の王国と辺境伯領の司祭たちに対し、二種による聖体拝領を、人々に、ただし数年にわたって思慮深い態度で慎重深く謙虚に願い出た人々に与える権利を、彼らの利益と主のもとの救いのために施す。ただし次のことは守られねばならない。司祭はそのような聖体拝領を受ける者には必ず、パンの中には（キリストの）体しかなく、葡萄酒の中には（キリストの）血しかないのではなく、どちらの中にも全キリストが存在していることを固く信じなければならないことを、教えなければならない。」

注4 Eberhard, *Konfessionsbildung und Stände in Böhmen*, pp. 41-42.

注5 アルブレヒトは1423年に、ジクムントからモラヴィアを封土として与えられ、ジクムントに協力してフス派との戦いを進めていた。

注6 Čornej, *Lipany*. pp. 37-40.

注7 以下の、ロキツァナに関する部分は、Heymann, *The Hussite-Utraquist Church* を参考にしてしている。

### 3. ボヘミア国家の担い手

すでに述べたように、フス派戦争の間に教会財産や国王財産の多くは俗人貴族の手に渡った。ボヘミアでは国内の村落の85パーセントから90パーセントが貴族の所有下に入ったといわれる<sup>注1</sup>。こうした貴族たちがボヘミアやモラヴィアで成長してきたのは、植民活動が活発に行われてこの地域の景観を一変させた13世紀のことであった。貴族たちの起源については不明な点が多いが、13世紀になると、それまでプラハを中心に主要な拠点を結んで支配していた君主と並んで、主に周辺地域における開墾活動によって自分の所領を拡大する貴族たちが登場してきたのであった。彼らは1278年に国王プシェミスル・オタカル2世が戦死した後の混乱期や、1306年にプシェミスル王朝が断絶した後などに、国政における発言権を強め、ボヘミア国家とはすなわち貴族の共同体のことであるとする強い政治的自覚を獲得するに至った<sup>注2</sup>。そして14世紀の初頭には、貴族の中でも特に強大な勢力を持つ大領主階層が現われ、上級貴族と下級貴族の区分が明瞭に現われていた。ただしその区分はいまだに制度的に確定されたものではなく、その後没落していった上級貴族もあれば、広大な所領や高い官職の獲得を通じて下級貴族から上級貴族へと上昇する者もいた。こうした貴族層、特に上級貴族層は、1310年に始まるルクセンブルク王朝の初代国王ヨハン（在位1310～46年）との間に激しい権力闘争を展開し、ヨハンがボヘミアの直接統治をあきらめて活動の場を出身地のルクセンブルクなど西欧に移した1318年以降、事実上貴族の寡頭政治とさえ呼ばれる強力な地位を築き上げたのであった。

ボヘミアの貴族の強い政治的自覚を表すものとして、1310年代に成立したと考えられる韻文の『通称ダリミルの年代記』<sup>注3</sup>がある。この年代記は、チェコ語による初めてのまとまった歴史叙述であると同時に、全編が強烈なまでの貴族側の視点で貫かれていることでも知られる。たとえば1310年のヨハンの国王即位については、一応これを歓迎しつつも、「神よ、この王をいつまでも守りたまえ、そして彼に、国の者たちを愛するように、チェコの領主たちを集めて会議を開くようによく教えたまえ。彼らとともにあってこそ王は名誉を獲得し、彼らなくしては国に平和をつくることはできない。」

と述べて、国王は貴族の助言にしたがって統治するべきだとの考えが述べられている<sup>註4</sup>。さらに、ここでいう貴族とは、すでに何世代もボヘミアあるいはモラヴィアに領地を築いてきた人々のことであり、君主の許可を得て国外から移り住んできた者は原則として含まれない。たとえば作者は騎馬試合などの西欧的習慣を軽蔑しつつこう述べる。「外国の習慣をまねしたいというならば、見てみるが良い。外国人をはびこらせ、外国人を会議にまで招いている人たちが、どこの国にいるというのか。外国の例に学ぼうというのなら、ためにもなろうし、立派なことでもあろう。しかし、ならず者の悪い習慣を取り入れるのは名誉を失い、徳を傷つけることにはかならない。」<sup>註5</sup>ここで非難の対象となっているのは、プシェミスル王朝の末期から国王の宮廷に勢力を築いてきた外国出身者であり、特にドイツ人であった。そしてその中には、世俗貴族だけでなく、高位聖職者や市民階層も混じっていた。したがってこのような新参者に対する貴族の反感には、階層的な自負心と一種の民族的な感情とが混在していた。

そしてこの作者は、外国人とチェコ人とをその言語によって区別する。そして舌あるいは言語を意味するヤズィク *jazyk* という単語を、それを話す人々の意味で用いている。たとえば戦場に倒れた国王プシェミスル・オタカル2世については、彼が多数のドイツ人を王国内に植民させて保護したことを指摘して、こう述べている。「ああ、生まれついたヤズィクを大切にしなかったとは、この高貴な国王の、何といたましいことか。このヤズィクによって彼はたいなる誉れと広大な所領を手に入れたのに。このヤズィクとともにあればさらに偉大なことがなしとげられ、どんな敵でさえ倒すことができたであろうに。」<sup>註6</sup>

しかし、このように強い政治的自覚と一種の民族意識を備えたボヘミアとモラヴィアの貴族は、14世紀前半にその勢力の頂点を築いた後、国王カール4世のもとで、一旦その地位を後退させることになる。プシェミスル家の最後の国王ヴァーツラフ3世の妹エリシュカを母とし、父ヨハンと違って幼年時代をボヘミアで過ごしたカールには、ボヘミアの風土や習慣、そして言語に親しむことはそれほど困難ではなかった。そして1333年に父の代理としてボヘミア統治を始めると、抵当に入っていた国王財産を取り戻しつつ、徐々に王権の基盤を再び強化していった。彼は非常に慎重にこれを行ったため、貴族たちとのめだった衝突は起こらなかった。さらにカールにとっては、1346年に選挙侯によってドイツ国王に選出され、同じ年にクレシーで戦死した父の後を継いでボヘミア国王に選ばれたことが大きな意義をもっていた。その後カールは、1378年に死去するまで、ボヘミアを本拠として帝国政策を進め、特にプラハはボヘミアのみならず帝国各地から高位聖職者や有力諸侯が集まる都市になったのである<sup>註7</sup>。

カールはボヘミアの貴族に依存しない国王権力の基盤として、高位聖職者を重視した。ボヘミアではヴィシェフラトの聖堂参事会長が伝統的に国王官房の長官の地位についてきたのを始め、1344年に司教から昇格したプラハ大司教には、パルドゥビツェのアルノシュト（在位1344～64年）、ヴラシムのヤン・オチュコ（在位1364～80年）など国王の友人が任命された。国王の周辺にはこうした聖職者中心の政治スタッフのグループが形成され、国王による統治と、貴族の支配領域とはますます切り離されていった<sup>註8</sup>。

しかし自分たちをボヘミア国家の代表者とする貴族たちの考えは、こうした時代を通じてなおも強固に残されていた。カールが数年かけて作成したボヘミアの統一法典、いわゆる「マイェスターズ・カロリナ」が1355年に貴族たちによって否定され、破棄されたことはそれを象徴している。そして、ドイツの出身者が宮廷でしだいに大きな勢力を築いていくことも、伝統的な貴族の国家観念とは相容れないものであり、『通称ダリミルの年代記』に表現されたような排他的な意識はなおも強く維持されていた。それだけでなく、高位聖職者が政治スタッフとして活動することに対しては、教会の改革を求める側からも批判を招く可能性があり、貴族が後のフス派の運動に一定の理解を示した背景には、政治体制をめぐる貴族の伝統的な観念も働いていたのである。カールの王権のもとで王領地が拡大し、さらに国王の保護のもとで教会や修道院に財産が蓄積されていくことは、貴族たちにとっては本来許容しがたいことであった。カールの後を継いだヴァーツラフ4世の時代になって国王と高位聖職者との関係が悪化すると、貴族はこれを一旦は失われた政治的地位を再び獲得する機会と捉らえて、国王に対する公然たる反乱を起こすに至った<sup>9</sup>。さらに1400年にヴァーツラフが選挙侯によってドイツ国王廃位を宣言されると、プラハの宮廷に多数の外国人が活動する理由も失われた。教会の純化と聖職者による世俗的財産の所有の禁止、そして同じく聖職者による世俗的権利の行使の禁止を訴えるフス派の改革運動は、まさにこうした状況のもとで発生し、貴族たちはその政治的混乱と戦争を、王国の代表者としての地位を取り戻す好機と捉えたのである。

しかしフス派戦争では、都市もまた軍事的、政治的に大きく活躍した。特に戦争初期の1420年から21年にかけて、プラハの都市同盟軍とターボル派の軍が共同して有利に戦いを進めた結果、一部を除くボヘミアの主要な拠点はほぼフス派によって制圧されることになった。1421年6月3日から7日にかけてプラハの東方の小都市チャースラフで開かれた議会で今後のボヘミア国家の運営の基本方針が定められたのは、まさにプラハの勢力が頂点に達した時期であった。その決議の文章の筆頭にはプラハ旧市街と新市街の市長、参事会員、共同体があげられ、次にこの年の4月にフス派に加わったプラハ大司教コンラート・フォン・ヴェヒタ、そして多くの貴族の名前が続いている。その後に「ターボルの人々および諸都市の管理者」が続き、さらに多くの貴族が続いた後、「神の法と我々を支持する大貴族、騎士、小貴族、都市、共同体」となっている<sup>10</sup>。そして本文では、前年の「プラハの4箇条」がほぼそのままの形で確認され、ジクムントが「ボヘミアの王冠を継承するのに不適格」として正式に拒絶された後、20人の執政官が選ばれて、王国の管理が委ねられることになった。その構成は上級貴族5名、プラハの代表4名、下級貴族11名となっている。下級貴族の中にはジシュカのような急進派の代表も含まれており、当時の情勢を反映して、プラハおよび急進派の勢力が非常に強い体制がここで成立したと見ることができる。

ただしこの一種の「革命政府」の活動は約半年続いただけで、その後執政府の構成は12人となった。ザイプトの指摘によれば、この12という数字はボヘミアの伝統的な州制度に対応したものであり、保守的形態への逆戻りとみなされる。しかも1423年に選出された12名は、フス派とカトリック派のそれぞれ6名から構成されていた。そして戦争終了まで、12人の執政府の大部分は上級貴族によって占められ、しかも革命勃発以前のヴァーツラフ4世時代に州長官として国王を補佐していた



人物が執政官という形で権力の座に戻っていた<sup>11</sup>。これは戦争の経過とともにプラハの都市同盟とターボルの都市同盟との緊密な関係が緩み、都市の地位が全体に後退したことによるものである<sup>12</sup>。それでも都市は1421年に獲得したものをすべて失ったわけではなく、議会で上級貴族、下級貴族に次ぐ部会を構成する権利は確保した。「第3の票」と呼ばれる都市のこの権利は、戦争終結後には、貴族と都市との間の紛争の原因としてしだいに深刻なものになっていく。貴族は都市のこの権利を奪おうと試みた。しかし特に15世紀後半になって都市が戦争による停滞から立ち直り、その経済力を強めるようになると、貴族の所領における市場の開設や、貴族によるさまざまな経営、たとえばビール醸造とその販売などが、都市の特権を侵害するものとして逆に都市の側からの批判の対象となり、両者の争いは次の世紀まで持ち越されることになる。

バーゼルの協約が承認された後のボヘミアでは、まさにこうした身分制的統合原理（それは同時に区分の原理でもある）にかぶさる形で、宗派という別の統合原理が働くことになったのであった<sup>13</sup>。二つの原理は、時には互いに重なり合い、時には互いに相手を分断する形で、ボヘミア国家の運営に大きな問題を投げかけていくのである。

ジクムントが1436年によくボヘミア国王としての承認を得られる見通しを得たとき、彼の前にあったのは、諸身分の力が最大限に強化された、そして中でも貴族が事実上の勝利者として権力を掌握しているボヘミアであった。貴族にとっては、それは王国の本来のありかたと、自分たちの本来の権利と地位とを取り戻したに過ぎなかった。『通称ダリミルの年代記』に表現された排他的な貴族の支配、そして国王ヴァーツラフとの闘争の過程で勝ち取った、各地方ごとに貴族が平和維持の役割を担う体制が、戦争によってほぼ完全に実現していたのである。フス派の信仰を守る闘争は、貴族たちにとっては、国王に対抗して諸身分の自由を守る闘争でもあった。彼らにおいては、信仰の自由の要求と、戦争によって獲得した地位と財産を維持する要求とは、「ボヘミア国民の自由」という概念のもとで一体となっていたのである。

ではボヘミアの国家運営はいかにすれば可能と考えられたのであろうか。それはジクムントが国王選出直前の1436年1月6日に、モラヴィアのウヘルスキー・ビェレフラトで諸身分に与えた親書に表されている。その内容は、教会の管理、支配に関するボヘミアの諸身分の完全な権利を国王が承認すること、そしてその上で、フス派が行ってきた二種聖餐が今後も維持されることであった。具体的には、(1) ボヘミアとモラヴィアの教会の職務および教会の位階から外国人を排除する。(2) 聖職者をも含めて、ボヘミアとモラヴィア以外の裁判所への召喚を禁止する。(3) 一種聖餐は、過去に二種聖餐が行われたことがない場所でのみ許容される。これに関する紛争を防ぐため、二種聖餐が行われていたあらゆる教会などのリストを作る。(4) 諸身分はプラハ大司教およびオロモウツとリトムニェツェの二人の属司教を選出する権利をもつ。(5) 二種聖餐を行う人物も聖職者になることができる。(6) 過去に二種聖餐が行われていた教会では、聖杯派の聖職者が任命される。かつてのカトリックの聖職者がその教会に戻る場合、彼は二種聖餐をほどこさねばならない。以上の6点であるが、ジクムントはこの親書を最後まで撤回しなかったため、フス派はこれをバーゼル協約の一部とみなすことができた。ここに公会議などカトリック側との間に重要な解釈の違いが生まれることになった<sup>14</sup>。

ここで認められている「二つの宗派の共存」が、個々の貴族の支配域ではなく個々の教区教会を単位に構想されていることは注目すべきである。すなわち、カトリック派とフス派のどちらの領主も、自分の所領の中に他の宗派の教会があることを容認しなければならないのである。一つの国を二つの宗派で成立させることがいかに困難であったかを我々はそこに読み取ることができる。諸身分はあえてその課題に挑戦し、貴族の間での宗派の抗争を未然に防ぎ、さらにプラハなどの都市でも二つの宗派の教会が勢力争いを始めないように配慮したものということができるだろう。

しかしこの親書の最も重要な点は、新たに位につく国王がボヘミアの再カトリック化に着手するための手段がこれによって封じ込められたということにあるだろう。都市内部は事情が異なるが、貴族たちに関するかぎり、カトリック派とフス派が共同で国政を担当していくという体制は、すでにフス派戦争の期間中に実現していたともいえる。つまり、後の1485年の協定に結実するような宗派共存の体制は、貴族の共同体の内部に関するかぎり、すでに形成されつつあった。しかし今や戦争は終結し、これまでフス派の敵とみなされていた人物が国王の地位につくことになった。この国王がボヘミアの再カトリック化をはかる可能性が非常に強かったからこそ、彼らはこのような親書を勝ち取らねばならなかった。すなわちこの親書は、二つの宗派の共存よりも、国王に対する諸身分特に貴族の権利闘争という側面を重視して捉えるべきだと思われる。

ジクムントは1436年8月23日に16年ぶりにプラハに入ったが、そのほぼ一ヶ月前の7月20日に勅書を発布して、諸身分の権利をさらに確認した。二種聖餐の自由を繰り返し認めていることのほか、重要なのは、諸身分によって選ばれた顧問の同意の上で統治することを認めた第3項、戦争中に諸身分の手にわたった教会財産や国王財産に関して、返還を要求しないことを認めた第5項、外国人を官職につけないこと（ただしこれはモラヴィア、シレジア、ラウジッツには適用されない）を認めた第12項である<sup>415</sup>。

実際にはジクムントはボヘミア国王になると、カトリック復興と王権強化の試みに着手した。しかし彼はその成果を見ることなく死去し、ボヘミアの諸身分に与えた特権は撤回しなかったので、この時点では「ボヘミア国民」の自由は保たれていた。

しかしボヘミアの諸身分を主体に、バーゼル協約にもとづきつつ、二つの宗派の共存の上に国家を運営していくには、さらにいくつもの困難が待ち受けていた。

まず、ジクムントは前述の勅書でフス派革命および戦争の間に貴族の手にわたった国王財産について、現状凍結を認めたが、彼の後を継ぐ国王が同じことを認めるという保証はなかった。ましてかつての教会財産の現状凍結にいたっては、公会議やボヘミアのカトリック勢力が、これをそのまま容認することは、とうてい考えられなかった。

また1436年1月6日の、ボヘミアの教会体制に関するジクムントの親書は、公会議の承認を得ていない。中でも問題なのは、ボヘミアの諸身分による大司教と司教の選出を認めた部分である。しかもすでに前年10月21日に、議会はプラハ大司教に聖杯派のロキツァナのヤンを選出していた。ジクムントは1436年7月13日にこれを承認したが、これは明らかに教会法に違反しており、公会議側の承認は得られなかった。この後ロキツァナは1471年に死去するまで事実上のプラハ大司教として活

中世後期における中欧の政治と文化——二つの宗派の国ボヘミアの国家運営——

動するが、正式な叙階を受けることはなく、その地位は教会監督官にとどまったのである。これはフス派の活動を大きく束縛することになる。

次に、バーゼル協約によって和解が成立したとはいえ、それは公会議との和解であり、教皇はこれを正式な文書とみなしていない。公会議側が主要な勢力である間は特に問題は生じないが、将来的に、教皇庁との間に対立が生じる可能性はあった。

最後に、バーゼル協約は聖杯派とカトリック教会との和解であり、これを承認しない急進派はターボルを拠点になおも一定の勢力を保っていた。同胞団が一つの宗派として発展を始めるのもこの和解以降であった。聖杯派を主要勢力とするボヘミア諸身分の政権は、かつて同じフス派に属したこれらの勢力にどのように対応するかの決断を迫られた。

このような多くの問題を抱えて大きく揺れ動きながら「二つの宗派の国」は発足したのである。

注1 以下、ボヘミアとモラヴィアの貴族に関しては Mezník, J., *Der böhmische und mährische Adel im 14. und 15. Jahrhundert*, in: *Bohemia* 28 (1987), pp. 69–91. を主に参照した。

注2 こうした貴族たちの政治的自覚については, Graus, F., *Die Nationenbildung der Westslawen im Mittelalter*. Sigmaringen 1980.

注3 *Rýmovaná kronika česká tak řečeného Dalimila* (以下 Dalimil) ダリミルという人物の作と考えられてきたが、後に誤りとわかったためにこのように呼ばれる。Fontes rerum bohemicarum, Tom III. Praha 1882所収。

注4 Dalimil 106.

注5 Dalimil 102.

注6 Dalimil 92.

注7 Moraw, P., *Zur Mittelpunktstfunktion Prags im Zeitalter Karls IV.*, in: *Europa Slavica – Europa Orientalis*, Festschrift für Herbert Ludat, Berlin 1980, pp. 445–489. またチェコの歴史家スビェヴァーチェクは、こうしたカールの「ボヘミア中心政策」の意義を特に強調している。Spěvák, J., *Karel IV. Život a dílo [1316–1378]*, Praha 1979. Kap. 5. Spěvák, J., *Prag zwischen West- und Osteuropa im Zeitalter der Luxemburger*, in: *Historica* 30 (1990), pp. 5–27.

注8 ボヘミア国王の支配領域全体から召集される一般ラント議会は、1356年を最後に、1419年のフス派革命勃発の年まで開かれなくなっている。Seibt, F., *Die Zeit der Luxemburger und der hussitischen Revolution*. in: Bosl, *Handbuch der Geschichte der böhmischen Länder I*. pp. 401–402.

注9 ヴァーツラフとプラハ大司教イェンシェティンのヤンとの争いを発端に、1393年に反国王派の大領主同盟が結成され、国王は1394年に捕えられた。1396年にヴァーツラフの義弟でハンガリー国王のジクムントの仲介により和解が成立し、ヴァーツラフは宮廷の高位の官職の任命権を失い、また国内各地域の平和維持を上級貴族から任命されるポプラーフツィと呼ばれる裁判官に委ねなければならなくなった。しかしなおも対立は続き、1402年にヴァーツラフはジクムントらの手によって再び捕えられ、ウィーンに送られた。1403年にこの闘争は一応終わったが、国王の統治権力は制限され、上級貴族が国政に進出することになった。Hoensch, *Geschichte Böhmens*, pp. 135–140.

注10 AČ III. pp. 226–230. ここに現われる「共同体」(communitas, Gemeinde, obec) の定義については Seibt, *Hussitica*, Kap. 4.

注11 Seibt, *Hussitica*, pp. 158–159.

注12 フス派時代の議会の構成とその変化については Hlaváček, I., *Husitské sněmy*, in: *Sborník historický* 4

(1956), pp. 71-110.

注13 Eberhard, *Konfessionsbildung*, pp. 45-46.

注14 AČ III. pp. 427-431. Šmahel, *Husitská revoluce IV.*, pp. 190-191. なお関連部分の本文は次のとおりである。

「第一に、ベネフィキアはボヘミアやモラヴィア辺境伯領の外国人に与えられてはならず、これらを与える権利はことごとく、国王、ボヘミア人、そしてボヘミア王国とモラヴィア辺境伯領の住民に、永遠の権利として属すべきである。

世俗および聖界の人々は、王国あるいは辺境伯領以外（の裁判所）に召喚され、裁かれるべきではなく、どのような人々も、上に述べた王国と辺境伯領の、自分の所属する機関の裁判権に従うべきである。ただし、プラハ大司教の自由と、大司教に所属する人々からの控訴を受け付ける特権は、損なわれることなくそのまま維持されるべきである。

さらに、上にしばしば述べた王国と辺境伯領で一種の聖体拝領を受けている人々は、混乱を避けるために、自分の意志や自由に反する扱いを受けるべきではなく、過去において二種の聖体拝領が行われたことがない場所でのみ、受け入れられるべきである。そして争いの原因やきっかけを除くために、そこにおいて、そしてそれによって二種の聖体拝領が実際に行われていたあらゆる場所、個々の教会、教区の人々など（の名）が、今後も永遠にそれが維持されるように、書き留められるべきである。そしてそのための文書に記載されたことは、永遠に確実に記憶にとどめられるように、余の印章によって確認される。

さらに余は、ボヘミアの高貴な領主たち、貴族たち、有力者たち、著名人たち、プラハその他の都市が、聖職者たちとともに、プラハ大司教および他の称号司教たち、別名属司教たちを選出するように望む。そして選出された者は、余の適切なはからいと配慮により確認され、いかなる承認手続き、パリウムの授与、あるいは書記による確認を受けることなしに、司教として叙階される。そしてプラハ大司教区のあらゆる聖職者は、上に述べた領主たちによって選出された大司教のもとに置かれ、彼に従わねばならない。

プラハ大司教区の聖職者たちは、一種と二種のどちらの聖体拝領を行っている者も、彼らの能力と適格性によって採用され、神聖な職務につけられ、叙階されるべきであり、聖体拝領の方式を理由に拒絶されるべきではない。パーゼルの神聖な公会議は、ボヘミア王国およびモラヴィア辺境伯領に住むすべての人々に対して、二種の聖体拝領を受ける許可を与えている。従って、オロモウツおよびリトムニェツェの司教たちは、二種の聖体拝領を望む俗人に、聖体拝領を施さねばならない。さらに、二種の聖体拝領を俗人の人々に施すことを望む聖職者たちを、彼らの適格性と能力に従って受け入れ、彼らを職務につけ、神聖な職務へと叙階するべきである。そして、自分の司教区で、過去に上に述べた聖体拝領が行われていた場所では、やはり同じように、人々に二種の聖体拝領を施す司祭を、任命しなければならない。そして、教区司祭が、自分が属する司教の承認と許可を得て自分の本来の教区に戻りたいと願う場合には、（それまで）二種の聖体拝領を受けてきた人々に対して、また二種の聖体拝領が行われてきた所では、二種の聖体拝領を施すべきである。もしもそうしなかった場合には、（そうした教区司祭は）認められるべきではなく、俗人の人々に二種による聖体拝領を施したいと考える別の者が、司教あるいはその他しかるべき人によって、代わりにその役目につけられるべきである。」

注15 AČ III. pp. 446-449. それぞれの本文は次のとおりである。「彼ら（ボヘミア人とモラヴィア人）が選出する顧問を余は承認し、彼らとともに正義を行おうとするものである。この顧問に別の人物を加える場合には、彼らと相談したうえで行う。(3)」「ボヘミア、モラヴィアその他の地域で、この戦争の間に多くの城、砦、修道院、教会その他が破壊され、損なわれた。余はどのような身分や地位の人物あるいは共同体であれ、それら破壊された城、砦、修道院、教会その他の再建を強制しない。自由な意志でそれらを行うのに委ねる。(5)」「ボヘミアにおいてはボヘミア人以外のいかなる外国人をも官職につけない。ボヘミア王国に所属する他の諸邦においては、余の父および他のボヘミア国王が文書や特許状によって定めていたとおりにする。(4)」

#### 4. 「宗派の共存」と王権

ジクムントがプラハに入ると、それまでフス派の中心的な理論家として活躍していたロキツァナやイングランド人ピーター・ペインはプラハを追われることになった。またリパニの戦い以降もなおも抵抗を続けていた急進派の貴族ドッバーのヤン・ロハーチは捕らえられて、9月19日に支持者たち60人とともにプラハで処刑された。しかしジクムントは翌年12月9日に死去したため、彼の試みたボヘミア王権再興がほとんど進まずに終わったことは、すでに触れたとおりである。

ジクムントには男子がいなかったため、ボヘミアとハンガリーの王位継承者としては、女婿のオーストリア大公アルブレヒトが指名されていた<sup>註1</sup>。ボヘミアに関しては、これはかつてカール4世が定めたルクセンブルク家とハプスブルク家の相続協定に沿うものである。アルブレヒトはジクムントに協力してフス派に対する戦いを強力に進めてきた人物であったが、バーゼル協約を尊重することを誓約したため、議会は彼をボヘミア国王に選出した。ハンガリーでもやはりアルブレヒトが国王に選出されたため、オーストリア、ボヘミア、ハンガリーという16世紀に出現するハプスブルク家の帝国の中核部分が彼のもとで一時的に統合されたことになる。

しかしアルブレヒトは在位わずか2年で1439年10月に死去した。翌年2月にようやく遺子ラディスラフが生まれたが、この後ボヘミアは1453年まで空位期間に入る<sup>註2</sup>。この間に権力の分散が進んで貴族はさらに強力になり、彼らは州の組織を基礎に平和維持を目的とした同盟を結んで、それぞれの指導者のもとに結集した。この組織はドイツ語を借用してラントフリートと呼ばれている。その中で特に強い指導力を発揮したのが、プラハ北東のムラダー・ボレスラフを拠点とするラントフリートの首領、ポジェブラディのイジーであった。彼は、リパニの戦いに穏健派の一人として参加したこともあるフス派貴族だが、ボヘミア国内の最大のカトリック勢力ロジュンベルク家とも姻戚関係にあった。

イジーは、ラディスラフの後見人であるドイツ国王フリードリヒ3世に対し、幼少のラディスラフをボヘミア議会が国王に選出する代りに、バーゼル協約が尊重され、ロキツァナの司教が教皇によって正式承認されることを要求した。ところが1448年にボヘミアに向かった教皇使節カルヴァヤルがこうした要求を一切拒絶する態度に出たため、イジーは同年9月2日から3日にかけての夜にプラハを軍事制圧し、カトリック派の首領フラデツのメンハルトらを捕らえて実権を握った。多くのカトリック系の市民が市を退去し、交代にロキツァナを始めとする聖杯派の有力者たちが戻ることになった。

しかしその後新しい教皇使節エneas・ピッコローミニのもとで、教皇側の態度がやや軟化し、イジーはフリードリヒの承認を得て、1452年4月27日のボヘミア議会で2年を任期とする摂政に任命された。この年の9月にイジーはターボルを攻撃して急進派の勢力を一掃し、さらにロジュンベルク家にもイジーの正当な権力を承認させたことで、イジーの統治の基盤は強化された。そして翌1453年にはこの摂政職はさらに6年延長され、彼の保護のもとで、ラディスラフはこの年にボヘミ

ア国王に選出され、空位期間は終わった。

イジーはフス派という自分の宗派にかかわりなく、二つの宗派の共存のもとで国内情勢の安定に努め、フス派戦争中およびその後の空位期間中に弛緩したボヘミア、モラヴィア、シレジアの結びつきを再び強化しようとした。しかしフス派の影響のほとんど及んでいないシレジア、特にヴロツワフ市がイジーに対して反抗的であったこと、国王ラディスラフが「異端的な」ボヘミアをあまり好まなかったことなどから、彼の試みは非常に困難であった。

そうした状況下で、1457年11月23日にラディスラフが在位わずか4年でプラハで急死した。後継者としては、ポーランド国王カジミェシュ、ザクセン大公ヴィルヘルムのほか、ハプスブルク家やヴァロア家などからも名前があがったが、国王選挙は翌年まで持ち越され、1458年3月2日に、下級貴族や都市勢力の圧倒的な支持を集めたイジー自身が、国王に選出されたのであった。

当時のボヘミアでこの国王選挙を、フス派の国王の誕生として、またボヘミア出身の国王の誕生として受け止め、歓迎する人々が多かったことは確かであろう。『ボヘミア古編年誌』はこの時の様子について「これは誠実なチェコ人にとっては大変な喜びであった。神様のおかげでチェコ人は、チェコ人に対して、特に聖書に忠実な人々に対して悪事をなそうとするドイツの国王の権力から解放されたのだ。その喜びに多くの人々が涙にむせんだ。」と記している<sup>注3</sup>。また、遅くともこの時には成立していたと考えられる『ボヘミア年代記抜粋』は、「チェコ人たちは、よそのヤズィク、特にドイツのヤズィクの支配に陥らないように用心し、それにあらゆる努力を傾けるべきである。チェコのいろいろな年代記が教えるとおりの、これはチェコのヤズィクおよびスラヴのヤズィクを倒そうとする最も獐猛なヤズィクなのだ。」と述べて、『通称ダリミルの年代記』に現われた反ドイツ感情が、より具体的に、広まっていたことを示している<sup>注4</sup>。

しかし国王としてのイジーの課題を、そのような単純な見地から見ることはできないことはいくまでもない。彼のめざすのは、あくまでバーゼル協約の原則にもとづいて二つの宗派の共存をめざすことであり、それを強力な王権のもとで実現させることであった。そのために彼は、自分ではフス派の信仰を維持しつつ、二つの宗派の国王であることを強調し、対外的には、教皇によるバーゼル協約とロキツァナの司教位の承認を獲得することを最大の課題としていた。しかしこれが非常に困難であることは当初から明らかであった。まず、ロキツァナが教皇から正式承認されていないために、5月7日に行われた彼の戴冠式は、2人のハンガリーの司教によって行われたが、その事前の約束として彼は教皇に対して「自分の国民を誤謬、分派、異端から引き離し、聖なるローマ教会の式典と祭祀を復活させる」ことを密かに誓約しなければならなかった。これは文字通り実行すればカトリックへの改宗を伴わざるをえない。また、自ら上級貴族の出身でありながら、国王となった彼は、大きくゆらいだボヘミア王権の建て直しを進める立場に立ったわけであり、貴族身分との関係をいかに調整するかという難しい問題が彼の前には控えていた。

イジーのボヘミア王国統治の特徴の一つは、それが活発な外交活動と一体となっていたことにある<sup>注5</sup>。特に、かつての教皇使節エネアス・ピッコローミニが1458年に教皇ピウス2世（在位1458～64年）となり、イジーをドイツ国王に選出させる可能性を示唆したことは、イジーの政策にも大き

く影響した。しかしこれを実現させるためには、イジーは戴冠の時の約束を実行に移す必要があったが、聖杯派の期待を担ってボヘミア国王に選ばれている以上、それは事実上不可能であった。イジーが同胞団を弾圧し、また教皇が要求する対オスマン帝国遠征に応じる意向を示したのも、教皇からなるべく有利な条件を引き出そうとするためのものであった。しかし、イジーが繰り返し教皇に対してバーゼル協約の承認を求めたのに対して、教皇は、おそらくヴロツワフの使節の働きかけにより、1462年3月31日に協約の破棄を正式に通告した。ローマ教会とボヘミアとの和平はこれで解消したのである。

イジーは、一層の外交的手腕によって周辺諸国との協調を保つ必要に迫られた。彼はまず皇帝フリードリヒ3世との関係を強化し、ウィーン市民の反乱に際しては皇帝を支援した。フリードリヒと弟アルブレヒトとの内紛もイジーの仲介によって解決しており、仲介者としてのイジーの存在を印象づけることになった。1463年にはプラハで諸侯会議が開かれ、バイエルン・ランツフートの大公ルートヴィヒとアンスバッハ・クルムバッハのアルブレヒトとの紛争をイジーが仲介している<sup>注6</sup>。

しかしこうした個別の交渉以上にイジーの外交活動の壮大さを示すのは、1462年以降、彼によって提示されたいわゆる「キリスト教諸侯同盟案」であろう。これはイジーの顧問マルティン・マイルおよびアントニオ・マリーニらによって作成され、1462年5月のポーランド国王カジミェシュとの会談において初めてとりあげられたものと考えられている<sup>注7</sup>。その後この案はヴェネツィア、ブリュッセル、パリ、クラクフなどの宮廷や政庁に提示された。現代の国際平和機構の発想を先取りするものとまでいわれるこの案については独自の研究がなされねばならないが、ここではその概略だけを見ておくことにしたい。

文書の前文ではまず、現在のキリスト教世界が異教徒の攻撃によって危険にさらされ、凋落しつつあるのは、内部の不和が原因であると説き、キリスト教世界に真の平和が確立されねばならないとする。そして本文においてその具体案が示される。

それによればまずキリスト教世界はフランス、ドイツ、イタリア、スペインの4つの「ナツィオ」ごとに構成され、それぞれフランス国王、ドイツの幾人かの国王たちと君主たち、ヴェネツィアの元首、カスティリア国王が率いる。そして4「ナツィオ」の代表が集まって委員会を構成し、それぞれが一票ずつを投じて重要事項を決定する。

委員会の役割は、構成メンバー間の平和維持および外部からの攻撃に対する防衛措置であり、各構成メンバーは他のメンバーに対して武力を行使してはならない。委員会はその決定の執行のために、傭兵軍からなる軍隊を維持し、その維持および戦争遂行のための費用は各メンバーが共通の比率で負担する。そして軍事行動についての最高の決定権は委員会に属し、さらに委員会は共同の軍事行動によって獲得した地域の管理方法についての決定権を持つ。また、メンバー相互の紛争の調停、および平和の侵害についての裁判を担当するため、委員会によって選ばれた裁判官が裁判所を構成する。

そしてこの委員会は1464年2月26日にまずバーゼルで召集され、5年間そこに置かれた後、フランスへ、さらに5年後にイタリアに移る。そしてこの諸侯同盟の代表は、委員会がフランスに置かれる期間はフランス国王、イタリアに置かれる期間はヴェネツィアの元首となっているが、最初のド

イツに置かれる5年間については明確な記載がない。しかしそれまでのイジーの外交活動からして、イジー自身がその地位につくと考えていたことは間違いないであろう。

このようにイジーの諸侯同盟案は、ヨーロッパを対等ないくつかの地域の連合として構想して平和維持にあたるというものであり、教皇と皇帝を二つの頂点とするそれまでの観念を大きく踏み越えて、新たなヨーロッパ像を提示するものであった。そのねらいが、教皇に依存することなく自らの国王権力を安定させようとするににあったのはいうまでもない。その限りでは、この諸侯同盟案はイジーの個人的関心から生まれたものである。これが1464年にフランス国王ルイ9世に示されて一定の理解を得たのを最後に、ほとんど消えてしまうのも、最終的にはそうしたところに原因があると考えられる。しかし、ボヘミアという国を二つの宗派で形成していこうとする努力が、ヨーロッパ全体を複数の君主たちの連合で構成していこうとする発想と結びついていったことの重要性を、ここで見逃すわけにはいかないであろう。

一方イジーは国内では、二つの宗派の共存、そして諸身分の均衡を可能なかぎり実現させようと試みた。そのために彼は、聖杯派とカトリックの合同の教会会議を開くなどの政策を通じて、双方からの支持をとりつけるべく努力している。また空位期間中に勢力を築いた上級貴族のラントフリートに対しては、ラント裁判所の権限を強化することで対抗しようとした。ラント台帳記載の所領を持つすべての人間を対象とするこの裁判所において、彼は下級貴族に8票、上級貴族に12票をわりあてたのである。またフス派革命以来の教会財産の世俗化、および国王からの贈与で獲得された財産を管理するために5名からなる委員会が、そしてラント台帳を審査し、また補充するために上級・下級貴族各2名からなる委員会が作られた。

また、国王都市はラント裁判所においては、国王が任命する王領地管理官を通じてしか代表権を持たなかったが、イジーは都市の経済力を重視し、宗派や民族にかかわらずその支持を保つように努力している。

しかしこうしたあらゆるイジーの努力は、結局は実を結ぶことはなかった。1465年9月の議会では、シュテルンベルクのズデニェクを中心とする反国王派の上級貴族が、「上級貴族の意向が王の政策に反映されていないこと」「諸身分の同意なしに戦争が行われていること」「聖杯派の聖職者が平和を乱していること」などをあげて国王を批判し、11月には16人の上級貴族が反国王同盟を結んだ。そして1466年には教皇によってイジーとその家族および支持者に破門が宣告され、1468年には、かねてからボヘミアへの軍事介入の意向を伝えていたハンガリー国王マーチャーシュとイジーとの間に戦争が生じた。この戦争は1479年まで続き、「第二次フス派戦争」と呼ばれることもある。

本来カトリック勢力の強いモラヴィア、シレジアの貴族や都市はイジーに反抗してマーチャーシュを支持した。そして1469年5月3日、モラヴィアのオロモウツにおいてマーチャーシュは、カトリック同盟の諸身分およびプルゼニとブジェヨヴィツェの二つの市によって、ボヘミア国王に選出された。これに対抗してイジーは、自分の一族には王位継承権を放棄させて、ポーランド国王の子ヴワディスワフを継承者に指名した。親教皇派のヤゲウォ家からあえて王位継承者を選んだのは、そうすることによってボヘミアの孤立を避け、ハンガリーとの戦いにおいて背後の安全を確保するねらいによ



るものと思われる。

この戦争の最中、1471年3月23日にイジーは死去した。二つの宗派の共存と、周辺諸国との協調の上に王権を築こうとする彼の試みはついに挫折した。しかし彼が最後までなおも外交交渉による問題解決の道を放棄せず、教皇庁との交渉が続けられ、教皇がバーゼル協約を承認する可能性でさえ消えてはいなかったこと、そしてボヘミアで最後までイジーを支持した人々の中には多数のカトリック派が含まれていたことは、指摘しておかねばならないであろう。

注1 以下、イジーのボヘミア国王選出までの記述は、主に Hoensch, *Geschichte Böhmens*, pp. 154–158による。

注2 ドイツにおいては1440年に同じハプスブルク家のフリードリヒ3世（在位1440～93年）が選挙侯によって国王に選ばれた。またハンガリーでは、反ドイツ的感情の高まりから、ヤゲウォ家のポーランド国王のヴワディスワフ3世が国王になった。しかし彼は1440年にヴァルナでオスマン帝国と戦って敗死したため、ラディスラフの王位が認められ、対オスマン帝国戦争で活躍した下級貴族フニャディ・ヤーノシュが摂政となった。1457年にラディスラフが急死した翌年、ヤーノシュの子フニャディ・マーチャーシュが国王に選出される（在位1458～90年）。

注3 *Staré letopisy české z vratislavského rukopisu novočeským pravopisem*. F. Šimek (ed.), Praha 1937. p. 123. この編年誌は、1378年から1527年までのボヘミアを中心とする歴史を、複数の著者が書き継いでいったもので、全体にフス派の立場から書かれている。

注4 『ボヘミア年代記抜粋』という名称は、これを編纂したパラツキーがつけたものである。テキストは Urbánek, R., *O volbě Jiřího z Poděbrad za krále českého 2. března 1458*. Praha 1958. pp. 29–41. 成立年代については Graus, F., *Die Nationenbildung der Westslawen im Mittelalter*. Sigmaringen 1980. p. 95.

注5 以下、国王としてのイジーの政策に関する記述は、主に Seibt, *Die Zeit der Luxemburger*, pp. 545–565による。

注6 こうした活動は、プラハが再び国際的な都市として上昇していくためにも役立った。Šmahel, F., *Prag in der zweiten Hälfte des 15. Jahrhunderts*. in: E. Engel, Karen Lambrecht, Hanna Nogosseck (hrsg.), *Metropolen im Wandel. Zentralität in Ostmitteleuropa an der Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, Berlin 1995. pp. 185–211.

注7 テキストは Bartoš, F. M., *Návrh krále Jiřího na utvoření svazu evropských států a jeho původce doktor Martin Mair*. in: *Jihočeský sborník historický* 12 (1939), pp. 65–82. に収められている。その他この諸侯同盟案に関しては、Vaněček, V., F. Kavka (ed.), *Cultus pacis. Étude et documents du <Symposium pragense cultus pacis 1464–1964>*, Praha 1966. Heymann, George of Bohemia. Chap. 13. Macůrek, J., *Dvoji návrhy 2. poloviny 15. století na organizaci Evropy: českého krále Jiřího z Poděbrad (1458–1471) a moldavského knížete Štěpána velkého (1457–1504)*, in: *Sborník prací filosofické fakulty brněnské university*, 1965, C 12. pp. 93–101.

## 5. 宗派共存と諸身分—「クトナー・ホラの協定」の評価—

1471年に15歳でボヘミア国王となったヴワディスワフは、ポーランド国王カジミェシュ4世と、かつてのドイツ国王アルブレヒトの娘エリーザベトとの間に生まれ、母方を通じてかつてのルクセンブルク王家につながっていた。しかし彼自身はボヘミアでは全く基盤を持たず、またマーチャーシュ

との戦争を続ける必要からボヘミアの諸身分の協力のもとで統治しなければならなかった。この後1526年にハプスブルク家に王位が引き継がれるまでの「ヤゲウォ王朝時代」は、ボヘミアで諸身分の勢力が最も強められた時代とされている。

マーチャーシュとの戦争は一種の消耗戦となって10年にわたって続いたが、ようやく1479年7月25日になって、オロモウツで両者の平和協定が成立した。その結果、両者はともにボヘミア国王をなおり、正当な君主としてこの国家を分け合うことになった。すなわちヴワディスワフはボヘミアを、マーチャーシュはモラヴィア、シレジア、ラウジッツを支配下に収めたのである。しかしマーチャーシュが先に死んだ場合には、ヴワディスワフはこの3領域を40万グルデンで優先的に買い戻す権利を留保した。そして実際に1490年、マーチャーシュの死後にこれら「ボヘミア王冠諸邦」は再びヴワディスワフのもとに統合されることになる<sup>注1</sup>。

1471年のイジーの死去に際してヴワディスワフの王位がボヘミア議会によって承認されたのは、国王が厳格なカトリックであっても、二つの宗派の共存を認められるならばよいと考えられたからである。しかしこの国王のもとで、徐々にカトリックを支援する動きが高まるのは、やはり避けられなかった。そして1479年にマーチャーシュとの和解が成立すると、同時にカトリック派の貴族の復権も進められた。この時カトリック派の貴族たちが掲げた要求には、聖杯派の排除と議会からの都市代表の排除が含まれていたが、当面問題とされたのは、宗派の問題だけであった。そして両宗派の反目が高まる中で、1480年には、教区民は通う教会を自分で選んでよいという決議が議会で行われている<sup>注2</sup>。

聖杯派は、こうした展開を見通していたかのように、すでに1478年にロキツァナの後継者ヴァーツラフ・コランダらの指導下に独自の議会を開いて、宗派体制の組織化を図っていた。そして最高決定機関として8人の聖職者と4人の俗人からなる委員会が作られ、コランダがその長 Administrator になった。さらに聖杯派を政治的に代表し、保護するために3人の上級貴族が選出された。これらは、いまだに不完全なものとはいえ、後のプロテスタント教会の組織につながっていくものといえる<sup>注3</sup>。

しかし、国王はボヘミアの宗教的分裂がこうして進行するのをくい止め、カトリック化政策を強化しようとした。その結果、1483年9月にプラハで聖杯派の暴動が発生し、聖杯派が市の実権を握った。ジクムントの親書を引き合いに出して一種聖餐の禁止を迫った彼らに対しては国王も強行手段をとることができず、翌1484年のプラハの議会で両派の和解が成立した。そして1485年3月13日に、クトナー・ホラの議会で最終的な和解文書が承認された。これがクトナー・ホラの協定と呼ばれる文書である<sup>注4</sup>。

この協定では、まず国王が一種聖餐と二種聖餐の双方を正当と認め、聖体拝領の方法にいかなる強制があってもならないと述べた後、上級・下級の貴族と都市が次のように宣言する。すなわち(1) 聖体拝領は各自の信念にしたがって受けることができる。(2) 司祭は、それぞれの教区の習慣どおりに聖体拝領を自由に行うことができる。教区民は、自分の受けたいと思う方式の教会に通ってよい。(3) 領主は領地の住民に聖体拝領の方式を強制してはならない。都市においても同じである。(4) 新たに

司祭が任命される時には、その教会で行われてきたのと同じ方式の聖体拝領を行う司祭が任命されねばならない<sup>注5</sup>。

この協定は、二種聖餐をも正当と認めた1436年のジクムントの親書を確実に実行するために、内容をさらに具体化したものといえる。その結果、このような、教区民一人一人の宗派選択の自由を保証し、領主や都市当局による強制を禁止した協定が成立したのである。その成立年代を考えれば、これが先進的かつ画期的な宗教寛容令であることはいうまでもないだろう。事実、ボヘミアにおける宗教紛争はこの協定によってひとまず鎮静する。そして強力な諸身分の権力のもとで、宗派共存が実現していくことになる。

しかしこの協定が宗教上の寛容を認めたという点だけを強調するのは、正しい捉え方とはいえないのではないだろうか。まずこの協定は、すでに重要な勢力になりつつあった同胞団を対象外としていることで、寛容令としては大きな限界がある。さらに、教区民が教会を選ぶことができるという規定も、実際に領主の強い支配下にある教区でどの程度実現されたかは疑問であるといえるだろう。

しかし、寛容令としてのこの協定が持つ最も本質的な問題点はさらに別のところにある。それは、この協定がボヘミアにおける貴族の体制強化と不可分に結びついていることである。フス派戦争終結後、約50年を経て、ボヘミアでもようやくカトリック勢力が復興しつつあり、その一方で聖杯派は独自の宗派体制を築こうとしていた。そうした現状に対応するために、いまだにローマ教会や諸外国からは異端的とみなされている聖杯派にも国内における安定した地位を認めて、今後は宗派を理由に争わないことを両派の貴族が互いに確認し合う必要があった。この協定の本質はそこにあると考えるべきである。いわば、この協定は一種の紳士協定なのである。

貴族たちが宗派の結束よりも身分の結束の方を重視する傾向は、すでにフス派戦争の最中から現われていた。もともと、フス派を支持する貴族たちの行動は、「ボヘミア王国民」の自由を侵害する公会議やドイツ国王に対する抗議行動という側面を持っていた。そしてその傾向は、フス派戦争の展開とともに一層強くなっていった。ジクムントに対するフス派貴族の闘争は一種の反王権闘争であり、イジーに対するカトリック派貴族の闘争も、その立場が逆転したものとみなすことができる。そして王権が弱体なヤゲウォ王朝に移り、貴族たちにとって以前ほど恐るべき存在ではなくなった時、彼らが互いの反目を控えて二つの宗派の現状維持を取り決めたのは、必然的であったとさえいえるのではないだろうか。

もちろん、諸身分の勢力の強い権力分散型の国家であったからこそ、こうした宗派共存が実現したことも事実である。しかし、国家の統合という観点から見れば、身分を越えた秩序を形成し、王権をその代表者として位置づけつつ宗派共存をめざしたイジーの王権にこそ、より画期的な意義が見出だされるのではないだろうか。結果としては挫折したとはいえ、強力な王権の確立と二つの宗派の共存という、当時としては両立しがたいように思われる目標をかかげ、しかもそれを国際的な視野のもとで実現していこうとしたイジーの努力に、一層の評価を下すべきであるように思われる。

事実、クトナー・ホラの協定は、貴族勢力と都市勢力の闘争の始まりでもあった。1490年にハンガリー国王に選ばれたヴフディスワフが宮廷をブダに移し、ボヘミアの実権がほぼ諸身分に握られた

後、両者の抗争は、都市の「第3の票」および経済的特権の擁護をめぐる長期にわたって続いた。そして1500年に貴族勢力の立場を強く反映させた「領邦条例」が成立した後、都市が巻き返しを図り、ようやく1517年10月24日の「聖ヴァーツラフの協定」で、貴族と都市は互いの権利を認めあう形で妥協に至った<sup>注6</sup>。しかしその一週間後にドイツで生じた教会改革運動は、数年のうちにヨーロッパ的な規模の宗教紛争となってボヘミアをも巻き込んでいくのである。

以上、フス派戦争以降のボヘミアの宗派共存体制について、諸身分の動向を含めながら一つの見通しをたてるべく試みてきた。この考察では、宗派が担った政治的な機能に重点を置いたため、信仰の本質にかかわる部分には立ち入ることができなかった。その点も含めたフス派運動の研究は今後の課題としたい。

注1 このように1479年のオロモウツの協定は、ルクセンブルク家時代以来の「ボヘミア王冠諸邦」が分裂解体する可能性を含んでいた。しかしマーチャーシュの死後、モラヴィア、シレジア、ラウジッツにおいてヴラディスワフの君主権が容易に承認されたことは、王冠諸邦に統合を求める内在的要因が備わっていたことを示すと見ることもできる。Bahlcke, J., *Regionalismus und Staatsintegration im Widerstreit. Die Länder der Böhmisches Krone im ersten Jahrhundert der Habsburgerherrschaft (1526-1619)*. München 1994.

注2 Eberhard, *Konfessionsbildung*, pp. 50-52.

注3 Eberhard, *Konfessionsbildung*, pp. 48-50.

注4 1483年の暴動に関しては Šmahel, F., *Pražské povstání 1483*. in: *Pražský sborník historický* 19 (1986), pp. 35-102.

注5 AČ IV. pp. 512-516. 関連部分の本文は次のとおりである。「主なるイエス・キリストの体と血を一種あるいは二種の方法で拝領するという信仰に関しては、国王陛下は次の通りにするのが適切であると考えられる。すなわち聖俗の党派は、他の党派を圧迫、迫害してはならない。(中略)そして大公たち、領主たち、騎士たち、それに国王都市の住民たちで、主なるイエス・キリストの体と血を二種の方法で拝領する習慣を持つ聖職者や従属民に圧迫を加えたり、非難したり、彼らの慣習と信仰に従って自分の救済を求めることを妨害してはならない。同様に、主なるキリストの体と血を二種の方法で拝領する習慣の領主や騎士や都市は、一種の方法で拝領する習慣の従属民や聖職者を持つ場合、そのような従属民や聖職者に対して圧迫を加えてはならない。(中略)

しかるに、もしもいずれかの教区に、一種であれ二種であれ、司祭が尊い聖性を分け与えるときに行うのとは異なる習慣を持つ人々がいた場合には、その者は自分の信じる救済に適すると思われる場所で拝領を受けて自分の救済を求めることができ、その者はキリスト教徒としてふさわしく扱われ、他の点でいかなる不都合もあってはならない。

次に、我々のうちいかなる者も、世襲の土地や抵当として保有する土地に現在いる従属民や将来の従属民が、一種と二種のどちらの方法であれ、彼らが自分達の救済に適すると信じる拝領の習慣を安心して守れるようにするべきであり、彼らの意志をないがしろにして、自分であるいは配下の聖職者を通じて彼らに何かを強制あるいは要求したりしてはならない。(中略)

次に、今日司祭がいて、配属されている場所には、尊い聖性の授与に関して異なる習慣を持つ司祭を与えてはならず、今日定められているのと同じ(習慣の)司祭を与えねばならない。」

注6 Malý, K., *Svatováclavská smlouva. Třídní kompromis mezi šlechtou a městy z r. 1517*. in: *Universitas Carolina, Philosophica* vol. 1, no. 2. (1955), pp. 195-222.